

# 「一宮のおはなし」の絵本化

To picturize “Ichinomiya folk tales”

横川知之

Tomoyuki YOKOGAWA

## 1. はじめに

『一宮のおはなし』の絵本化は、昨年、自費出版した『一宮のおはなし』を、絵本として再出版する取り組みである。

新版『一宮のおはなし』は、一宮神社の由来を記した「中山神社伝説」と、一宮にまつわる『猿神退治』の「おはなし」の、「共通語版」「作州弁版」「英語版」を収めた。

## 2. 新版「一宮のおはなし」の構成

### (1) 『中山神社伝説』

中山神社の由来を、文献資料をもとに、わかりやすいお話に書き改めたもので、美作の国の一宮である中山神社がどのような経緯で築かれたものを分かり易く解説。

出典は、主に「国幣中山神社資料」

### (2) 『猿神退治』（共通語版）

一宮では、山から出てきて横暴をきわめる大猿（猿のボス）に手を焼いていた。

しかも、この大猿は、毎年、若い娘を生贄に取り、若い娘を持つ親を悲しませていた。

ある時、東国からやってきた若者が、その話を聞き、その大猿を懲らしめ、村の平和を取り戻す。

出典は「今昔物語」—美作国神依瀨師謀止生贄語

### (3) 『猿神退治』（作州弁版）

内容は上記と同じだが、表現を作州弁に改めて、地域の人々や子どもたちが馴染みやすいように編集。

方言の保存や見直しにも役立つ内容で、後世に遺す有用な地域資料となっている。

### (4) 『猿神退治』（英語版）

『猿神退治』を英訳したもので、中学校等の英語の補助教材として用いることや、国際交流の資料として用いることを考慮している。

## 3. 絵本化の意義や編集方針

ともすれば、忘れ去られたり失われたりしてしまう、地域の伝説や伝承を、公の出版物として残しておくことは、地域の伝説や伝承が、次の世代へと受け継がれ、地域のさらなる発展の糧となる。

そこで、今回は、昨年、出版した『一宮のおはなし』を、公的な出版社である「大学教育出版」から絵本として、再出版することにした。

再出版するに際しては、次のような点に工夫をこらし

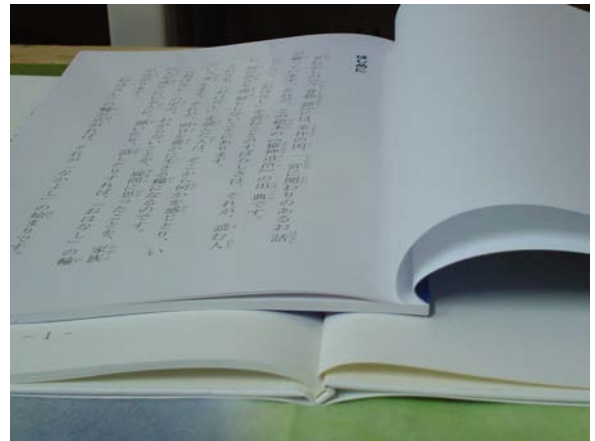
た。

- ①絵本の性質上「糸綴じ」製本にする。
- ②お年寄りから子どもまでが楽しめるよう、版とフォントを大きくし、すべての漢字に読み仮名をふる。
- ③挿絵をカラーにし、スライド紙芝居としても利用できるよう、その枚数に配慮する。
- ④「作州弁版」は、方言資料としての価値を持たせるため、表記や表現方法を工夫する。
- ⑤「英語版」については、中学生ぐらいの英語力でも読めるよう、その構文や語彙を見直す。

## 4. 出来上がりの比較

### (1) 装丁の違い

- a) 表紙が「厚紙」と「合わせ一枚」の違いがあり、質感に雲泥の差がある。



- b) 絵本版では、製本を「糸綴じ」にしたため、開いた状態で読むことができるが、旧版では、ホッチキス止めのため、折り開きになり、センターから開かない。
- c) 用紙を「光沢紙」から、ツヤ無しの「普通上質紙」にし、光りの反射を押さえた。

### (2) 「おはなし」順序の入れ替え

旧版では、

猿神退治（共通語版）

猿神退治（作州弁版）

中山神社伝説

猿神退治（英語版）

となっていたが、新版では、

中山神社伝説

猿神退治（共通語版）

猿神退治（作州弁版）

猿神退治（英語版）  
に改めた。

その方が、読み手が「おはなし」をスムーズに読み進められると思われる。



### (3) すべての漢字にルビ

「おはなし」の内容から、その対象年齢を「小学生」から「お年寄り」までとし、すべての漢字にルビを振り、活字も大きな物を使用した。

### (4) スライド紙芝居としても利用

「おはなし」を、「スライド紙芝居」としても利用することを考え、挿絵は17枚に収めた。

### (5) 方言資料として価値を持たせる

方言資料として価値を持たせるため、その表記方法や法則を出来るだけ統一した。

### (6) 英語教材としての使用も考慮

地域の中学生に、英語の副教材として利用してもらったり、国際交流の材料としても活用してもらったりするため、その構文や語彙、さらには、挿絵にまでも配慮した。



## 5. おわりに

再出版の取り組みの、第一目標は、『一宮のおはなし』を公的出版社から出版することにより、その図書資料としての価値を高めることにある。

今回の出版を通して、その目的は、ほぼ達成できたと考えているが、旧版を再び取り上げるに際して、幾つかの「見直し」や「改訂」をおこなったため、思わぬ時間を費やした。

また、「絵本」や「スライド紙芝居」としての位置づけをするため、原画をスキャナーで読み込んだり、デジタルカメラで写植したため、器材費や消耗品費にも思わぬ経費もかかった。

いずれにしても、作品としては、まずまずの出来栄えになったのではないかと考えている。